

第92回二松學舎大学人文学会大会講演題目・研究発表要旨

日時 平成十七年十一月十九日(土)
場所 柏沼南校舎1号館二〇五教室

講演

『清文評註読本』・『二松詩文』について

二松學舎大学名誉教授 川久保 廣 衛 先生

文学研究の一側面

——劇文学作品(謡曲)の場合——

二松學舎大学名誉教授 松 田 存 先生

研究発表

《国文学》

高橋源一郎『さようなら、ギャングたち』論

文学部国文学科四年 長谷部 哲 平

一九八一年、第四回群像新人長編小説賞の優秀作となった『さようなら、ギャングたち』は、「現在までのところポップ文学の最高の作品」(吉本隆明氏)や「脚光の中に躍りでた新しい文学の豊かなつ

ぼみ」(瀬戸内晴美氏)という評価を受けた、高橋源一郎のデビュー作である。

「ぼくの書いた『さようなら、ギャングたち』は、最初の一行から最後の一行まで全部で、「詩あるいは言葉は、さしあたって現在何か」という非常に限定された質問への、ぼくの答えなのです」と高橋源一郎自身は述べているが、このテキストはこれまでにさまざまな解釈をされ、多様に論じられてきている。その中には、高橋源一郎の学生運動と拘置所生活、失語症という体験をふまえた「転向小説」論や、詩と小説とをめぐる考察、ポストモダン文学としての考察などがある。

本発表では、テキストをポストモダン文学としてとらえるとともに、その語り手である「私」を「記憶」・「歴史」という面から分析していき、テキストにおける「語りの構造」を考察していく。

《中国学》

方孝孺「深慮論」考

日本大学櫻丘高等学校非常勤講師 濱 野 靖 一 郎
明初の人、方孝孺(一三五七―一四〇二、字は希直、又は希古。

正学先生と称す）はその苛烈な最期をもって知られ、我が国の儒者にも影響を与えている。頼山陽はその『方正学集』を家宝とし、佐藤一斎は著書『言志晩録』で

王文成の抜本塞源論・尊經閣記は、古今独歩と謂ふべし。陳龍川の酌古論、方正学の深慮論は、世を隔てて相頡頏す。並に有識の文たり。

と、その論に非常に高い評価を与えている。

方孝孺の政治論はつきつめると三代聖人の治の復興であり、「深慮論」も三代の治世の賛美であるのだが、盲目的に三代を絶賛するわけではない。「法」という、通例儒者の軽視する概念を持ち出して三代を解釈していく。

本発表は「深慮論」を使用し、そこで述べられている「法」に焦点をあてて、方孝孺の政治論を考察したい。

馮友蘭『新対話』に関する一考察

——「新理学」への道——

博士後期課程三年 小 暮 貴 代

馮友蘭（一八九五～一九九〇）は一九三二年から一九三五年にかけ『新対話』（一）～（四）を発表した。『新対話』とは現代（一九三二年）による対話である。馮は、西洋哲学の成果をすでに吸収したと朱熹に仮託して自分自身の「理」、道德観を明らかにしようとした。『人生哲学』（一九二六）で「ある類の物は共通点を有しており、

その類の他の類と異なる所以となっている。この類が共有する性質がいわゆる共相である。」とのみ述べられていたものが、『新対話』で「理」として明確な姿を現わした。馮はまず朱熹の靈に「飛行機の理」は、飛行機が発明される以前から時空を越えて存在しており、飛行機が発明者は、飛行機の理を「発見」することにより飛行機を製造できたと言わせた。これに対し張蔭麟（一九〇五～一九四二）から、古人が飛行機を造れなかったのは、飛行機が発明者と同じような経験をしていなかったからである、あえて飛行機の理と言うなら、それは重力学のある命題を示しているだけである、という反論が加えられた。

本発表ではこの論争を通観し、そこから馮が考えている「理」とはどのようなものであったかを考察し明らかにしたい。